
クローバー 私を想ってください

鈴代 明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クローバー 私を想ってください

【Nコード】

N2884G

【作者名】

鈴代 明

【あらすじ】

雪が降っていた学校のグラウンドも真っ白で…その中にぽつぽつと黒い足跡を残す 彼「ザッザッ」彼はボールで線を描いていた

雪が降っていた

学校のグラウンドも真っ白で：

その中に黒い足跡を残す人

「ザッザッ…」

彼はボールをひたすら転がして…

「何してるの？」

そう尋ねると

マフラーに顔を埋めた

少年が立ち止まった

「サッカー」

ぼつりと呟いた無愛想な彼

私は彼が好きなのだ

ただの片想い…

「そう…見てていい？」

そろそろ鼻が

赤くなるかもしれないけど

それでも隣にいたかった

コクリと頷いたのを確認して

すぐ側の段に少し腰掛けた

一生懸命練習する姿を

ずっと見てた

彼の息がとても白い

冬には合わないほど

綺麗な雫が彼の顎を伝った

ボールを転がしながら

彼は近づいてきた

「…？おしまい？」

そう尋ねた私の前で

彼は黒い衣装と

マフラーを放り投げた

「持ってて」

彼の口から白い息が漏れる

「か、風邪引いちやうよ？」

「俺、走ってるから」

真っ赤な鼻に流れる汗が

なんだか不思議…

ぎゅっと握ったマフラーが

彼の手によりするりとすり抜けた

「あっ・・・」

顔を上げた瞬間私の言葉が遮られた

視界の隅に映る緑

巻かれた首が暖かい

「あ、ありがとう・・・」

少し俯く私に

彼は少しだけ笑った

もう寒くなかった

彼の体温の残る黒い衣装は

私を肩から包み込んでいた

抱きしめられているようで

なんだか息苦しい…

頬はきつと寒さのせいに

出来ないほど赤い

「くしゅ！！」

しばらくして

日が沈みより寒さが

増してきたころ

彼のくしゃみで

夢見心地の世界から
一気に引き戻された
鼻を擦る彼の元に走った
「やっぱり返すよ!!」
か、風邪引いちやう・・」
首元がスースーして
思わず身震いした
チャリンと何かが落ちた
「落ちたよ」
そう言われ彼に拾われたもの
「あっ」クローバーの
キーホルダーがついた鍵
彼に拾われたクローバーが
小さく揺れている
「…幸運」 「・・え？」
彼はクローバーを
じっと見つめたまま続けた
「この花言葉」
「うん。そうだね」
「……。」
少しの沈黙のあと彼は
「もう1つ知ってる？」
そう言って私にクローバーを渡した
「もう1つ？」 「そう・・」
「…」 左右に首を振る私を見て
彼はかすかに微笑んだ
「好き？」 「・・え？」
クローバーと繋がられた言葉に
ほっと胸を撫で下ろした
「うん・・好き」

その言葉を彼に言うだけで
ドキドキする…

「じゃああげる…春になったら」
それまで待つててという彼の頬が
ほんのり赤いのは
寒いからなのか…
期待しちゃう

「ありがと・・・」

そう笑うと彼は
帰ると呟いて歩き出す

きつと頬が赤いのはお互い様
ゆっくりと歩く背中を追いかけた
ねえ本当は知ってるの・・・

もう1つの花言葉

約束を意味するクローバー
幸運を約束された私たちが
次に望む願い

その願いは……

—私を想ってください—

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2884g/>

クローバー 私を想ってください

2010年12月30日14時15分発行